

自然復元・ピオトープ創造 (中央図A-E)

かつての河北潟の環境要素を部分的に復元します。また現在ある環境を改良してピオトープ(野生生物の生息空間)化します。



A 人工島

人の近づくことができない潟の中央に直径20mほどの人工島を造成します。この島は野鳥の楽園として、また、他の生息環境との間を結び飛び石ピオトープとして機能することが期待されます。人工島を造成するにあたっては、外郭に波よけ用のブロックを設置したりしますが、できるだけ水面に露出しないように設置し、その内側には浚渫土を盛ります。土質からはハンノキなどから構成される疎林と、ヨシやガマなどの抽水植物が生育することが予想されます。疎林はサギ類などの絶好のねぐらとなるでしょう。この本体部分のほかに水流によって自然に砂州の半島部分ができることを想定しています。砂州は疎林をねぐらとする鳥類の恰好の餌場となることでしょう。ねぐらと餌場をもつ勾玉状の人工島は河北潟再生の始まりを象徴する構造物です。

B 幹線排水路

干拓地内の幹線排水路は、水域の少ない河北潟干拓地の中では重要な水辺環境です。水際の構造を工夫することにより、富栄養的な環境ではあるものの、河北潟にもともとみられる野生生物の多くが生息可能な場所とすることができます。また、下流部の左岸側には比較的広い土地が未使用のまま残っています。排水路とこの空き地を含めた広大な水辺ピオトープを造成します。この水辺ピオトープでは植生を伴う緩やかな傾斜をもった水辺を創設します。また、クリーク(細い水路)やワンド(水の流れの緩やかなくぼんだ水際)などの多様性のある水辺環境を造成します。さらに、この水辺ピオトープは道路下のトンネルにより潟の岸と結ばれます。水際植生をもつ排水路には、水質浄化機能も期待できます。

C 直線的な護岸の改修

才田大橋～内灘大橋にかけての直線的な護岸は、波が強く当たるため植生が育たず、生物の生息環境としては適していません。湖に突き出た堤防や消波ブロックを設置することによって、堤防の内側に徐々に土砂が堆積し、人工的でない水際環境が少しずつ形成されていくことが期待されます。植生の遷移も緩やかに進み、将来的には水際にはヨシやガマ、マコモといった抽水植物の群落が形成され、半閉鎖的となった堤防内側には、アサザなどの浮葉植物が繁茂することが予想されます。こうした植生が育つことにより、河北潟の水質の向上も望めるでしょう。また、水草は水生動物の生育場所や繁殖場所としても機能することが考えられます。計画ではこの水際は全体を自然公園として保全し、部分的に、市民が生き物とふれあう空間を設置することも想定しています。

D エコロード

河北潟干拓地内にはますます長い自動車道路が何本か通っていますが、こうした道路は、野生生物の移動の障害となり、生息場所を分断するものとなっています。高速で自動車が通過するために、野生動物の交通事故が絶えません。近年河北潟を通過して通過する自動車はますます増加しています。潟と干拓地を分断している才田大橋～内灘大橋の堤防沿いの道路と中央幹線道に、小動物が通過できるトンネルをつけることにより、干拓地内および干拓地と潟の連続性が改善されます。これにより、小動物の移動中の事故が減ることが期待されます。

E 中央幹線道路の改善

中央幹線道路は干拓地を二分していますが、幹線道路の下には、排水路の支線が横断して幹線排水路につながっています。この水路のトンネルにステップをつけ、陸生動物のための通路とします。また幹線排水路の岸には植物が生育できるようにして、水路のトンネルに小動物を導入するためのきっかけをつくります。幹線排水路と支線排水路の連絡をスムーズにすることにより、干拓地内のピオトープネットワークをつくりだします。また、水辺の植生は水陸双方の環境を必要とする動物の生息空間になることが期待され、さらに植生の浄化能力が発揮されることにより、排水路の水質改善にもつながることが予想されます。



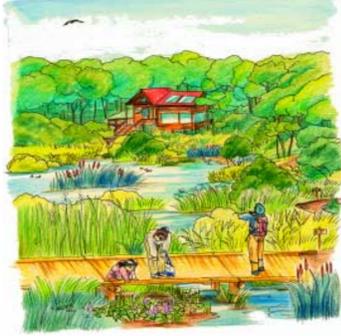
環境教育施設 (中央図F-G)

河北潟は低地や湿地の生物を観察することができる野外教育には絶好の場所です。河北潟に環境教育を促進するための施設を建設します。



F 環境学習センター(エコステーション)と湿地林観察舎

河北潟の北端、内日角地区の水辺はカヌーの練習場もあり、公園も整備されているために人が利用する親水空間となっています。ここに河北潟の自然と農業を学習するためのセンター(エコステーション)を建設します。センターでは河北潟の変遷や、現在潟に生息している生物、環境保全と農業の関係などを学べるようにします。また、自然観察会や学習会などをおこなう場として、センターを市民に開放します。水辺を回り込んだ干拓地内の一部に昆虫が集まる湿地林を造成し、観察舎を設けます。湿地林の中は遊歩道を整備して散策できるようにします。



G 湿地林

現在の河北潟には、マツの植林を除くと樹林がほとんどありません。太古の河北潟周辺にはハンノキ・ヤナギ類などから成る湿地林が広がっていたものと思われま。現在の日本では、湿地林のあった場所は、人間の長い間の活動により水田や都市などに変わっています。かつて日本に普遍的に存在した環境を干拓地の一部に、自然公園として復活させます。今回の提案では、大崎橋の近くの、現在は浚渫土を貯めている場所を候補地としています。



野生生物に配慮した農業形態・農地整備

干拓地は農地であり、農業をおこなう中で野生生物との共存のあり方を追求していきます。野生生物に配慮した農業のあり方、農地整備を考えていきます。



各支線排水路の活用

河北潟干拓地は各区画に必ず排水路が設けられています。またこの排水路は幹線排水路により結ばれています。各支線排水路を有効に利用して、水域ネットワークをつくることができます。水路周辺の草地を残し、さらに帯状の樹林をつくることによりコリドール(野生生物が移動するための回廊)としての機能を発揮させることができます。



点在するミニピオトープ

干拓地内には未耕作地や農業施設の余地を利用してさまざまなミニピオトープを創設します。それぞれのピオトープはかつての河北潟の環境要素を再現するものとし、ピオトープネットワークの観点からそれぞれのピオトープは幹線排水路両岸のヨシ帯との連絡を重視します。潟周辺部でも、農業用水路や休耕地を利用して、アサザやミスアオイなどの希少植物や渡り鳥のためにミニピオトープを創設します。



野生生物の生息空間としての農地

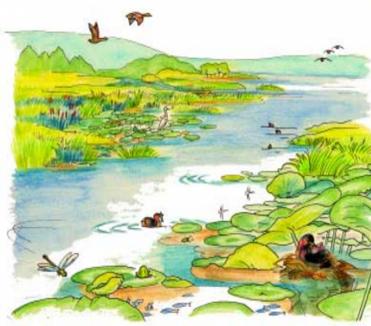
農地は作物や家畜を育てる場であり、もともと生物が生息しやすい環境です。農業を営む上では野生生物を排除しなければならぬ場合もありますが、部分的に農地を野生生物に提供することはできないでしょうか。例えば収穫後から次の作付けまでの間を野生生物に解放することにより、農地を野生生物との共存可能な場所とすることができます。使われていないハス田ではシギ類が餌をとる姿が確認できます。また、耕耘した後にムクドリやカラス、トビが群れて餌を探します。一方で、野生生物間の食物連鎖をうまく利用することにより、害獣・害虫のコントロールができるかも知れません。干拓地では野ネズミの被害がみられますが、河北潟に棲むチュウビヤノソリ、アオサギは野ネズミを好んで食べます。チュウビは1時間の間に10匹ものハタネズミを糞に与えることもあります。これら野鳥に生息環境を提供しながら農業をおこなうことは、生産者にとって決してマイナスになるばかりではありません。農作物の安全性が問われる今日にあっては、野生生物の棲む安全な農地からつくられる作物には商品としての付加価値も期待できます。

豊かな河北潟に・夢のある干拓地に(河北潟将来構想)

かつての河北潟は豊かな自然・野生生物と人々の暮らしが共存していました。河北潟をよみがえらせるためには、新しい共存関係をつくることが求められます。湖岸を自然公園化して、草原の種が引き続き生息可能な環境を残すとともに失われた多様な水辺環境を復活させること、そして干拓地は農地として、野生生物との共存を考えることが重要です。

保全対象区域 (中央図赤枠)

河北潟の中で優れた環境を有する区域を保全対象区域として選定しました。保全対象区域内では、できるだけ人為的な改変をおこなわず、野生生物の生息場所として保全することをめざします。



西部承水路(室橋-大崎)

ここは西部承水路の中では比較的広い場所です。ハスの群落が密生し、その他ヨシ、マコモ、ヒメガマなどの抽水植物も豊富な場所です。かつての湖岸の名残を残しています。また鳥類の重要な生息環境でもあります。堤防で隠されていることもあり、野生生物にとって安心できる場所の一つです。河北潟の水辺の風景を伝える場所として、また野生生物の生息環境として、重要な保全対象区域として選定しました。



東部承水路のヨシ帯

東部承水路の両岸は広いヨシ原となっています。河北潟の周辺地域を含めて、これほどの面積のヨシ原はみることはできません。この場所はチュウビヤツバメなどがねぐらとして利用するなど、ヨシ原を生息場所とする生物にとって、たいへん貴重な環境といえることができます。また津幡川河口付近は、一部に泥が堆積した浅瀬があり、鳥類の餌場になっています。現在、水面は漕艇競技などに使用されていますが、基本的には人為的な攪乱を避けたい場所です。ヨシ原の部分だけでも保全されるべきで、今回保全対象区域としました。



森下川河口

森下川河口には、上流より運ばれてきた土砂が堆積し、中洲を形成しています。この堆積物は川の氾濫の原因ともなりますが、鳥類や、砂地を生息環境とする動物の重要な生息環境です。ここには国際的な希少種であるクロツラヘラサギもやってきました。砂質の干潟は河北潟では多くなく、この森下川河口の中洲は保全すべき貴重な環境です。しかし、堆積が進行すると植生が成長して別の環境になります。中洲の一部を残した浚渫を実施することにより、砂州の状態を保つことができ、環境保全と治水対策の両立が可能となります。



金腐川の河口

金腐川の河口は土砂の堆積が進み、抽水植物やハンノキからなる比較的広い湿地となっています。ここでは多くの水鳥が観察され、そのほかにも多様な生物が交錯する生息環境となっています。また干拓前の河北潟の湖岸や河口域を連想させる数少ない地域です。この河口の周辺は、最近になって河川整備や改変が進められていますが、河口部分は、できるだけ人為的改変をおこなわずに、保全することが求められます。



野鳥観察会周辺のヨシ原
野鳥観察会周辺から金腐川河口へとつながるヨシ原は人が近づきにくい環境となっています。夏、ヨシゴイが近づき姿に出会ったり、カンムリカイツブリの交尾を目撃したりするもの、この岸辺のもたらす恵みです。大根防潮水の門の建設によって新しく生まれた環境ですが、現在では安定した環境となっています。冬にはカモ類が多く観察されます。鳥類が安心して生息できる環境として、人目から隠れたまま保全したい地域です。